

通し番号	4 1 7 5
------	---------

分類番号	17-32-13-05
------	-------------

(成果情報名) ナシ萎縮症の原因究明に関するアンケート調査結果
[要約] 平成 17 年度ナシ現地研究会において、生産者 59 名にアンケート調査したところ 90 %以上のナシ園に萎縮症の発生が認められ、「幸水」に多発しているものの「豊水」にも発生が認められている。また、15 年未満の若木の頃からの発生も 20 %程度ある。また、発生部位周辺に大きなせん定切り口跡が存在し、前年夏の乾燥や収量が多い翌春に多発するなど、水分ストレスや着果負荷についても関係が深いことが示唆された。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター果樹花き研究部 連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

ナシ萎縮症は県内ナシ生産者の 90 %以上に発生しており、対策技術の早期確立が強く望まれている。原因として木材腐朽菌病原説が有力であるが、これまでの所内プロジェクト研究から萎縮症が他の原因による可能性も存在する。そこで、生産者へのアンケートを実施し、発生の現状と多発条件について調査を行った。

[成果の内容・特徴]

1. 前回調査(1999 年)と同様、県内ナシ生産者の 90 %以上に萎縮症は多発しており、大幅な収益減少が考えられる発生量が園内の 20 ~ 30 %以上の園も 30 %に及んでいた(図 1)。
2. 主要品種に発生が認められるが、これまでの傾向と同様に「幸水」に多発している。ただし、本県の特徴として「豊水」にも発生が多い(図 2)。
3. 萎縮症の初発樹齢は、25 年以上が 40 %と最も多いが、15 ~ 25 年の盛果期からの発生も 40 %と多い。また、近年問題となっている 15 年未満の未成木からの発生も 20 %程度存在しており、今後発生量が増加し、収益の減少が拡大することも予想された(図 3)。
4. 樹体内の発生条件として発生部位周辺に垂主枝の切り替えを行ったなど、大きな切り口跡の存在が指摘されているが、アンケートでも 78 %の生産者が「ある」、「だいたいある」と回答した(図 4)。
5. 前年の気象条件や収量と翌年の発生量との関係では、25 ~ 30 %生産者が夏の乾燥や収穫量が多かった翌春に萎縮症の発生が「ある」と回答しており、水分ストレスや着果負荷との関係が示唆された(図 5)。

[成果の活用面・留意点]

1. 慣行栽培において暫定的な垂主枝を設置した場合は早めにせん除するなど、大きなせん定切り口を作らない。
2. 着果過多を避け、ナギナタガヤ草生などの利用による夏期の土壌乾燥防止に努める。

[具体的データ]

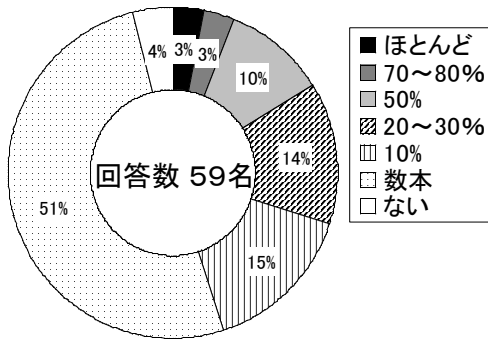


図1 生産者別の園内萎縮症発生量

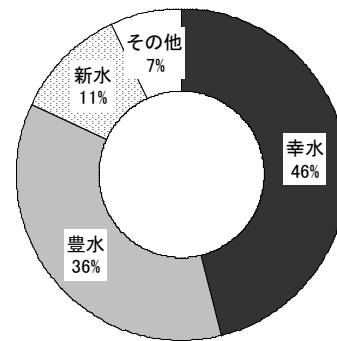


図2 萎縮症発生品種

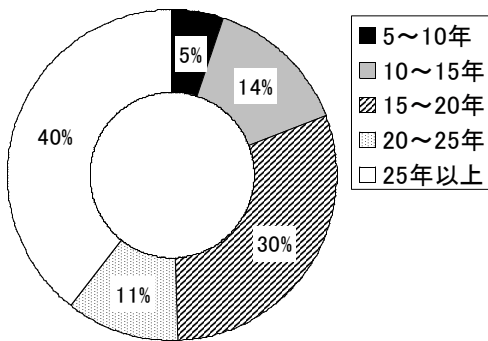


図3 萎縮症の初発樹齢

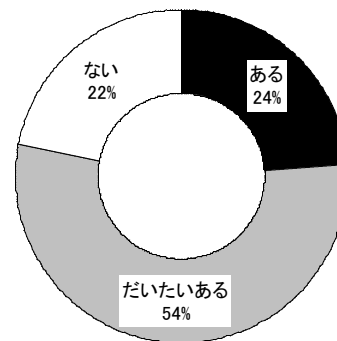


図4 発生部位周辺の大きな切り口の有無

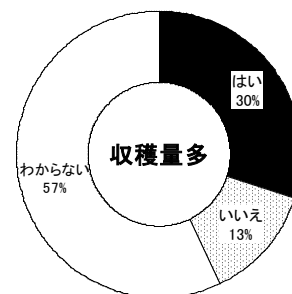
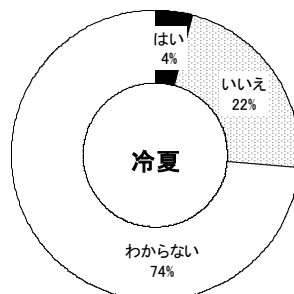
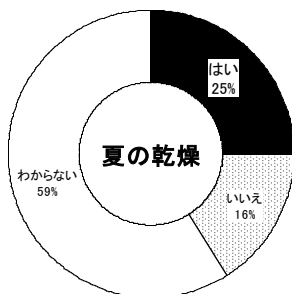


図5 前年の気象条件や収穫量と翌年の発生量との関係について

[資料名] 平成17年度試験研究成績書(果樹)  
 [研究課題名] (1) ナシ萎縮症の原因追及と治療および予防技術の確立  
 イ 生産者に対する「ナシ萎縮症原因究明」アンケート調査結果  
 [研究期間] 平成16~20年度  
 [研究者担当名] 柴田健一郎・小泉和明・関達哉・北尾一郎